孤愁

サウダーデ

SAUDADE

新田次郎

文藝春秋

孤愁

サウダーデ

SAUDADE

新田次郎

文藝春秋

孤愁（サウダーデ）　奥附

昭和五十五年七月十五日　第一刷
昭和五十五年九月　十　日　第二刷

定　価　一〇〇〇円

著　者　新田次郎（にったじろう）〈著作権継承者代表　藤原てい〉

発行者　杉村友一

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三　郵便番号一〇二

電話東京（〇三）二六五局一二一一

印刷　精興社　製本　大口製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Tei Fujiwara 1980　　Printed in Japan

目次〈孤愁（サウダーデ）〉

美しい国 5
赤い海 58
スナイドル銃実包 103
別離 127
地鳴り 167
コルク樫 215
領事代理 24
ネムの木 71
信任状捧呈式 115
外人墓地 136
神前結婚 177
露探 229
砲艦千島 37
野砲十門 83
徳島のおよね 148
里帰り 199
（無題） 247

解題

本書は昭和54年8月20日より毎日新聞紙上に連載が始められた。が、昭和55年2月15日、著者の急死により昭和55年4月8日にて中断、著者の絶筆となった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長篇小説

孤愁（サウダーデ）

新田次郎著

装幀　速永悦郎

美しい国

激しい雨がひとしきり続いた。
貨客船ベルギー号はその雨に辟易したかのように速度を落し、霧笛を鳴らしながら進んでいた。船客たちは夜のように暗くなり、雷鳴を伴った豪雨におそれをなしてか各部屋に引込み、不安そうな目を船窓に寄せていた。
日本の長崎港が間近いというのに、このような嵐ではと、彼等は一様に不安を抱いていた。三分の二の乗客は日本に来たことのある外国人であり、三分の一は初めて日本を訪れる外国人であった。
ポルトガル人、ヴェンセスラオ・デ・モラエスもまた入港を前にして突然襲って来た雨に対して目を向けたが、別に驚いた様子もなく、悠然とパイプタバコをくゆらせていた。
「ひどい雨だ。船は無事長崎港に着くことができるだろうか」
同室の英国人が言った。
「雨は三十分後には止むでしょう。そして間も無く晴れます」
モラエスはポルトガルの海軍少佐であり、マカオの港務副司令官の地位にいた。彼の航海の経験によるとこの雨は単なる雷雨であってそれほど長続きするものではなかった。
「三十分後にな」
英国人は香港から来た商人であった。彼はモラエスが士官の制服こそ着ていないが、身分がら海のことにくわしく、従って気象にも通じているだろうことを察しはしたが、降りしきるこの豪雨が三十分後に止むと自信ありげに言い切ったのにはいささか驚いたようだった。
「きっとだね」
「きっと晴れる。晴れねば詩にならない」
「詩？」
英国人はモラエスが突然言い放った詩という単語に戸惑ったように目を見張った。
「あなたは軍人なのかそれとも、詩人なのか」
「その両方である。さらにつけ加えるとあなたと同じような商人でもある」
「分らないな」
と英国人はいまさらのようにモラエスの顔を見直した。
この男はまだ四十歳を越えてはいないな。そんな気持でじろじろと見詰められたのが気になったのか、それとも、この部屋の空気に飽きたのかモラエスはパイプをくわえたままで立上った。六尺（一八一センチ）豊かな体軀をした彼が

歩き出すとただでさえ天井が低く、狭い船室がさらに小さく見えてくる。
「晴れねば詩にならないと言う意味は」
「日本が見えないからさ」
「ああ、なるほど」
英国人は見事にモラエスにかわされたことで苦笑しながら、
「さて、その日本はあなたにとって果して詩になるだろうか」
「詩にならねば、随筆か小説になるだろう」
英国人はいよいよ分らないという顔をした。
雨はモラエスが予言したようにそれから三十分後に止んだ。蒸し暑い船室の中で我慢していた乗客たちはいっせいに甲板に出た。
さわやかな風が甲板を吹き通っていた。沐浴をすませたベルギー号は元気を取り戻したように東に向って速度を上げた。
雨は止んだが、空は雲で覆われ、やがて西の空の雲間から太陽が顔を出すと、その光に追われるように雲は東側に掃き寄せられ、やがて西の水平線上にくっきりと太陽が姿を現わすと、東の空いっぱいに充満していた水蒸気の壁が白く輝きはじめた。
船は太陽を背にして白い水蒸気の壁に向って進んでいた。船が進むと、その距離だけ白い水蒸気の壁は後退して行くようでもあり、薄れて行くようでもあった。やがて、白い水蒸気の壁と海との境界にはっきりと隙間ができ、その隙間の向うに緑の大地が見え始めたとき、船の前面に雄大な虹が姿を現わした。
甲板に出た乗客の多くは声を放ってその美しい景色を称讃した。
「虹の門をくぐりぬけたところが日本だ」
英国人がモラエスに言った。だがモラエスはそれには答えず、双眼鏡を目に当てたまま熱心に前方を観察していた。
「なにか見えるかね」
英国人はモラエスが持っている双眼鏡を貸して欲しいというかわりにそのような訊き方をしたのである。
「虹の橋の向うに日本が見える」
モラエスは双眼鏡を英国人の手に渡すと、双眼鏡で覗いたばかりの緑の陸地が次第に姿をはっきりさせてゆくのを見詰めていた。緑が濃くなると、それだけ霧の壁は薄くなり、やがて虹は消えた。
モラエスは空を見上げた。完全に空は霽れ上り、おそらく今宵は満天に星を戴く夜になるだろうと思った。
船室に入る乗客は少なかった。長崎の緑の島や岬が夕陽を受けて輝く美しい光景に見とれたまま、時間の経つのも忘れているようであった。
モラエスは地図を手にしていた。彼はベルギー号が間違いなく長崎港へ向って進んで行くのを図上で確かめてから、

なにか言った。なにを言ったのか誰にも分らないほど小さな声だったが、よく手入れが行き届いた彼の口髭が動くのを英国人は見逃がさなかった。
「詩ができましたか」
英国人は双眼鏡をモラエスに返して言った。
「勿論できました。だが私の胸の中に書かれた詩が文字になって現われるには、なおしばらくの時間がかかるでしょう」
「さぞかし美しい詩でしょうね」
「さあどうでしょうか、悲しい詩かも知れませんよ」
モラエスはそう言ったとき、彼の瞳の中にはなにかしら淋しげな影が、瞬間だったが動いたようであった。
ベルギー号は長崎湾に入って行った。湾は細長く、それは湾というよりも河に入って行くようだった。
船が進んで行く両側の山の深い緑はしたたるばかりに輝いていた。右側は夕陽を真正面に受けて輝き、左側の一部は日蔭になっていたが、こまかい地形の隅々ははっきり見えていた。
モラエスは双眼鏡を再び手にしなかった。そこからはなんでも見えた。敢えて双眼鏡の助けを借りる必要はなかった。長崎湾を形成する地形のすべてに濃厚な緑の化粧がほどこされていた。なぜこのように鮮やかなのか疑問に思われるほど美しい濃い緑が海に向って流れこんでいた。附近の地形様相はポルトガルのリスボンの港になんとなく似ていて、リスボン港は海から河を溯ったところであった。だが、モラエスは、この長崎が、リスボン港よりもポルトの港によく似ていることに間も無く気がついた。
ポルトは大西洋からドウロ河を溯ったところにあり、両側が高い丘になっていた。地形的にはまことによく似ていたが、リスボン港もポルトの港もこのように深い緑には覆われてはいなかった。
モラエスは明治九年（一八七六年）二十二歳で海軍士官になって三十九歳のこの年まで、アフリカ、インド、アジアの各地を航海していた。緑のしたたる港は何ケ所か見ていた。現在彼が港務副司令官をしているマカオの港もその背後は深い緑に包まれていた。だが、それよりも長崎の緑は勝れていた。
今までこの目で見て来たどの国の緑と較べても、この長崎のみどりに勝るものはない。
彼はそう思った。確かに美しいのだが、どこがどのように美しいのか自分でもはっきり表現できなかった。雷雨に洗われた直後ということも美しく見える理由の一つであろう。日本という未知の国に対する大きな期待でもあるだろう。
（だが、それだけではない。確かにこの長崎の緑は美しい）
それはモラエスの心を惹きつけて放さないものがあった。じっと見詰めていると、胸が踊り出すような美しさであっ

た。更に見詰めていると悲しくなりそうな美しさであった。
「長崎では大いに儲けました。しかしもう長崎は終りです。これからは神戸です。横浜ですよ」
英国人がモラエスの耳許で言った。
美しい緑に心を奪われていたモラエスは現実に引き戻されて英国人の顔を見た。
「あれが日本の造船所です。日本はここに造船所を作り、一八八七年（明治二〇年）には二百噸級の汽船を造り、現在は五百噸から千噸の船を造ろうとしています。おそるべき国ですね。それから日本にとって、油断ならない国の船がこの港にやって来ていますよ」
英国人が指さした方を見ると、一目でロシアの駆逐艦と分る船が二隻並んで碇泊していた。
「冬になると、ウラジオストックからロシアの艦隊がやって来てここに碇泊します。ロシアにとっては、さぞかしこの港が欲しいでしょうね」
英国人は最後の方は小声で言った。
ベルギー号は長崎港の中心に入った。東側の平坦地に長崎の町があった。山手の緑の中にはほとんど家はなく、緑にかわって段々畑が見えていた。だが南側の外国人居留地区に目をやると、大浦の天主堂を中心として洋館が山手の丘にかけて立ち並んでいた。目を長崎港の西側に投げると、そこにも人家が密集していた。稲佐のロシア人居留地をはっきり確かめることはできなかったが、それらしい洋館がところどころに見えていた。
モラエスは大浦の天主堂にもう一度目を転じた。うす緑色の尖塔の下に教会堂の白壁が見えていた。
「教会の右手の丘の上に見える白壁の家がオランダ人のグラバー邸だ」
英国人はそう言ってから、モラエスがグラバー邸について説明を求めたならば、すぐそれに応じたいようなそぶりを示したが、モラエスは黙っていた。
彼は日本へ出張を命ぜられる前から特に日本に興味を持ち、長崎の歴史を調べていた。
グラバー邸についてモラエスは既に知っているようだったから、英国人はグラバー邸の下の大浦の天主堂に関する説明を始めようとした。だが、その前にモラエスは口を開いた。
「一八六四年（元治元年）、フランス人司祭プチジャンが殉職者の二十六聖人に捧げるため建てた教会である」
モラエスは言った。モラエスがはっきりと大浦天主堂についての蘊蓄を傾けたのを聞いた乗客の一人が、
「私はポルトガル人が建てた教会だとばかり思っていましたが、そうではなかったのですか」
と訊いた。モラエスはそれに対して、やや高い調子の言葉で答えた。
「ポルトガル船が日本の種子が島に漂着したのは一五四三年（天文一二年）です。フランシスコ・ザビエルが布教のた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

めに日本に来たのは一五四九年（天文一八年）でした。間も無く、ポルトガル船は長崎を盛んに訪れるようになり、教会もできたが、布教問題で日本側としばしばトラブルをおこし、一六三九年（寛永一六年）に至り、ついにポルトガルは日本から完全にしめ出されたのです」

モラエスはそれからの長い長い年月を懐古するかのように遠くに目を投げていた。モラエスの後を受けて、

「そして、オランダだけが日本と貿易を許された唯一のヨーロッパの国となった」

英国人がつけ加えた。

乗客の眼は長崎におけるオランダの象徴のように丘の中腹に見えるグラバー邸へひとしくそそがれた。船が止り碇をおろす音がした。

「さあ、上陸する準備をしませんか。勿論今夜あなたは船では寝ないでしょうね」

英国人がモラエスに言った。

貨客船ベルギー号は長崎で積荷をおろし、別の荷物を積みこんで明後日の朝早く出帆することになっていた。従って乗客は一夜を陸地で過すことができた。

「私にとって日本は初めての夜です。上陸したいと思っています。ホテルベルビューに一応は予約しておきました」

「ホテルでお泊りですか、これは驚きました」

英国人はいかにも驚いたような様子を見せた。それに対してモラエスは一応は訊いてみた。

「お知り合いの家でもあるのですか」

「私はたたみの上に寝ます」

「ああ、日本の旅館のことですね」

しかし、英国人はそれ以上、日本の旅館のことは言わずに、

「あなたは長崎の歴史についてはくわしいようですが、長崎自体についてはほとんど御存じないらしい。よかったら私が御案内しましょうか」

と言った。

波止場から次々と艀（はしけ）が漕ぎ寄せられて来て乗客を乗せて陸地へ向った。

長崎で下船する者もあったが、多くは長崎を経由して神戸か横浜に向う者だった。彼等は荷物らしいものは持たずに、艀に乗った。

モラエスは、船から艀に乗り移ったところで改めて港を眺めた。大きな船と船との間を小さな舟が走っていた。汽船に石炭船が近接し、石炭船から船倉に梯子が掛けられ、多くの日本人の手から手への順送りで石炭が積みこまれていた。遠くてその人たちの表情は分らなかったが、鉢巻きをした男の中に髪を手拭で覆った女性が混って働いているのが珍しい光景に見えた。

港にはほとんど波は立っていなかった。税関波止場の石の階段のところに艀が横付けになり、人が舟から石段へ体重を移すときだけ、足許に不安を抱いただけであった。

上陸した外国人は洋館風の構えをした長崎税関でいっさいの手続きを済まし、外貨を日本の金に交換して外へ出ると、通りに人力車がずらっと並んでいた。

モラエスにとって人力車ははじめての経験ではなかった。シンガポールで人力車に乗った経験がある。マカオにも人力車が多かった。だが日本で見る車夫の服装は違っていた。紺の法被に紺の前掛け、紺の股引、紺足袋に草鞋がけ、そして彼等は申し合わせたように白布の覆いをかけた菅笠をかぶっていた。胸から覗いている白いシャツが清潔な感じを与えた。近よると、異様なにおいがする、シンガポールやマカオの車夫とは違っていた。

「まずどこへ御案内しましょうか」

英国人が言った。

「ホテルベルビューに行って、まずチェックインをします。それから長崎の夕景を眺めたい」

彼は空を見上げた。日暮れまでには間があった。

英国人は右手の二本の指を前に突出して二台の人力車を呼んだ。

年長の方の車夫が英国人の前にぺこりと頭を下げた。

「ホテルでちょっと止り、それからグラバー邸まで行ってくれ」

車夫はすぐ答えて歌うように言った。

「アイゴウ、ユーゴウ、グラバーハウス、テンセン」

英国人は頷き、モラエスに人力車に乗るように目で合図した。

英国人が乗った人力車が走り出し、その後をモラエスが乗った人力車が走り出した。走り出して気がついたことだったが、英国人が乗った人力車の後を別な車夫が押しながら走っていた。モラエスはホテルベルビューでチェックインするとすぐ人力車に戻った。人力車は間もなく、狭い坂道に入った。セミの鳴き声が山をふるわせていた。一人が人力車を曳き、一人が人力車のあとを押しているのである。どうやら、歩道と人力車が走る道とは違っているようだった。車夫が喘ぎながら車を曳いている様子がよく分るので、モラエスは人力車を止めて歩いて登りたいような気持になった。何度かそう言おうとしたが言えなかった。

「ここでよろしい。しばらく待っていてくれ」

英国人は車夫に言って人力車を止めた。そこはグラバー邸のすぐ下であった。そこから、石畳の坂を更に上ったところに恰好な見晴し場所があった。

英国人はこのあたりから長崎を眺めるのが一番美しい。グラバー氏はよいところに家を建てたものだと言った。

モラエスはこの英国人が自分の心の中まで見透しているような気がした。船の中でグラバー邸を見詰めていたとき、丘の中腹のその場所から船の方を見たいという気持はあった。その場所に連れて来てくれたことはありがたかった。

細長い長崎港には大きな船が二〇隻ほどいた。その一つであるベルギー号は、呼べば声がとどきそうな距離にあっ

た。
長崎の町にはほとんど隙間がないほど人家が溢れていた。すぐ眼の下に見える、大浦天主堂を中心としての外国人居留地以外はすべて、日本家屋の瓦屋根ばかりであった。ホテルベルビューの隣りに大きな屋根が日が没して間も無い空に向って黒い固い表情をして、そり返っていた。それが日本の神社か寺であろうことは、すでに予備知識として持ってはいたが、日本へ上陸してまず屋根から長崎を眺めたことに、なにか変っためぐり合わせのようなものを感じた。
ペルギー号で長崎の緑を見たときのあの全身がふるえるような感激はここではなかったが、長崎の美しさは、船で見るよりも、この丘で眺めたほうがより現実的であった。長崎港の海を囲むように発達した町の景色よりも、幾重にも連なって見える、緑の山波が美しかった。
モラエスは丘に沿って吹き上げて来る風に頬を打たれながら、日本は予期した以上にすばらしいところだと思った。
モラエスは石畳の道を歩きたかった。ポルトガルのリスボンのように石畳の道が日本の長崎にあることが意外のようであり、当然のようにも思われた。それを自分の足でたしかめたかった。上陸したらまず歩くことが楽しみになっていた長い間の海軍の生活を通してみても、この際人力車に乗ることはなかった。
モラエスは英国人にその意志を率直に伝えると、彼はすぐ賛成して、
「では歩いてホテルベルビューまで行き、夕食後、また人力車に乗ることにしましょう。長崎の夜の町はいいですよ」
と言った。
英国人がなぜこのように人力車にこだわるのかモラエスには分らなかった。多分日本人が曳く車に乗って走るという単純な優越感をこの男は味わいたいがためだろうと、心の中で軽蔑しながらも、この男とさよならを言うほどの勇気もなかった。長崎ははじめてのところだった。
石畳の道を景色を眺めながらゆっくりおりて行くと、花のかおりがした。洋館の庭の花壇がよく整理されて、ほとんどモラエスが知っているようなヨーロッパ種の花が咲いていた。ヨーロッパでは見られぬ、明らかに日本種のユリと思われる白い大輪が咲いている庭の前では思わず足を止めた。彼は白い花が特に好きであった。
クスの木のにおいがただよっていた。そのよく光る下葉はまだ露に濡れていた。
ホテルベルビューのレストランには船の中で顔を見知っている乗客が何人かいた。久しぶりの上陸に彼等は異常なはしゃぎ方をしていた。
二人はゆっくりと夕食を済ませると、すっかり夜になった町へ行くために、ホテルの前に出た。そこにも何台かの人力車が待っていた。モラエスは直ぐに人力車には乗ろうとはせず、海岸通りをへだてて海を見た。海の中に浮いて

いる多くの船のマストに掲げられたランターンが夜の港の飾りになっていた。予想していたように空には一点の雲もない星月夜だった。

「さあ丸山だ。夜の天使の城へ行こう」

英国人がそう言ったときモラエスは、人力車が行く先はおそらく遊廓であろうと想像した。彼が畳の上で寝ると言った意味が、今になって分ったことを苦々しく思いながら、常識として知っている日本の遊廓と実際の遊廓とがどのようにへだたりがあるか、見たいという気もいささかはあった。

人力車は丸山へ向って走った。暑いせいもあって、狭い道に人がいっぱい出ていた。モラエスは人力車の上から多くの日本人を見た。老人、子供、娘……、その中で特にモラエスの目をひいたのは娘たちであった。目を奪うような派手な着物ではなかったが顔と髪がよく似合い、着物姿に下駄や草履のはきものが調和が取れて見えた。着物のガラまでいちいち見ている間もなく人力車は彼女等の前を通り過ぎて行った。

モラエスは美しい娘さんと目が合うと、人力車を止めて、じっと見ていたいような気持になるのだが、人力車は梶棒に提灯をかかげ鈴を鳴らしながら、雑踏の中を走っていくから、ゆっくりと観察することはできなかった。

長崎についてすぐ丘の上に登り、長崎の屋根を見たときのように、人力車の上から日本人の頭を見おろして走っていることにモラエスは常でない自分を意識していた。なにかよくないことをしているようであった。だが一度に多くの日本人の目が、しかも、それらの目のすべてが好意を持って見上げているという確信は、彼にとって大きな喜びでもあった。悪意をこめた視線は感じなかった。

人力車は丸山の遊廓のはずれで止った。街路にはガス灯が輝き、二階建て、三階建ての大きな家が両側に立ち並んでいた。男たちがその街路を歩いていた。その中には、西欧人も散見された。洋館風の家もあり、純日本風の家もあった。門をくぐって中に入ると、たたきになっていて右側の張り見世に娼妓等が居並び、たたきの左側には娼妓の写真が掲げられていた。電灯が輝いていた。脂粉のにおいと、どこからか聞こえて来る三味線の音が異常な雰囲気をかもし出していた。

英国人はさっさと右側の娼妓の張り見世へ行って、ずらりと行儀よく並んだ女性たちの前を歩きながら相手を探しているようであった。娼妓たちのなかには片言の英語を話すものもいたが、目が合うとにっこり笑うか、恥しそうに身をよじったり、手を組み直したり、坐り直したりする以外は、客に対して積極的に出ようとはしなかった。他の娼妓と客の奪い合い、そして、面倒を起したくはないという配慮のようでもあった。彼女等の着物は美しかった。美しかったが重そうだったし、暑くるしそうに見えた。白壁のように化粧した彼女等の額に汗が粒になって浮き出ていた。

英国人は細面の女を選んだ。
彼は靴を脱いで楼に上るとき、
「いちいち顔を見て選ぶのがいやなら写真で選んでもいいのだぜ。ここにいい妓がいなかったら他の家へ行ってみる手もある。急ぐことはないさ。夜は長いからな」
彼はそう言い置いて妓と手をつなぎ、広い階段を上って行った。
モラエスは張り見世から、左側の写真が掲げてあるところに来た。娼妓たちの顔写真の上に裸電球がついていた。遣り手ばばあが出て来てモラエスになにか言った。なにを言っているのか分らなかったが、彼女はすぐ引き返して洋装した娼妓の写真を五、六枚持って来て彼に渡した。この中から相手を選べということらしかった。モラエスはちらっと写真に目をやっただけだった。彼は幾許かの金をその女に渡すと、黙って外へ出た。隣りの妓楼へ行って見るつもりは毛頭無かった。彼は、なにか日本に裏切られたような気がした。
彼はもと来た方向へ引き返した。丸山の遊廓を出たところのガス灯の下に、人力車の溜りがあり、その前に足袋屋があった。漢字で大きく山口たびと書かれた看板が掲げられていたが、彼には読めないし、単足袋の意味も分らなかった。入口に吊り下げた大きな白足袋の見本が目についた。
彼は、ついさっき英国人と連れ立って階段を上って行った娼妓が白足袋を穿いていたことを思い出した。それだけが強く印象に残っていた。
モラエスは足袋屋に入った。番頭が畳の上に坐り、客はたたきに立っているという相対関係が不思議に思われた。ぬっと入って来た外国人に番頭はちょっと驚いたようだったが、すぐ作ったような笑顔を示して、座蒲団をすすめた。
モラエスは座蒲団に腰をおろし靴の上から足袋を穿く真似をした。外人客が足袋を買いに来たことが分ったのだから、番頭は大きな声で小僧たちに足袋を持って来るように命じた。
モラエスは靴を脱ぎ、靴下を取って日本の足袋を穿いて見たが、どの足袋も彼の大きな足には合わなかった。番頭は両手を畳の上に置き頭を下げ、客にあやまった。
「あそこにあるのなら多分この足に合うだろう」
モラエスは宣伝用に吊り下げてある足袋を指さして言った。その意味がどうやら通じたらしく番頭や小僧が笑い出した。そしてくどくどとその足袋は売り物ではないことをのべ立てた。モラエスは自分の足に合う足袋は無かったが、マカオに居る亜珍のために目見当で二足の女ものの白足袋を買った。女ものだということを分らせるのにまた時間がかかった。
モラエスはマカオに着任して間もなく、英国人と中国人の混血である亜珍を知り、非公式の結婚をしたのは明治二十三年（一八九〇年）で亜珍が十八歳、モラエスが三十六歳の時だった。それから三年、現在は一人の男子があった。

亜珍のために白足袋を買ったことでモラエスは上機嫌だった。小僧が茶を運んで来て前に置いた。

彼はそれを飲んだ。緑茶はにがいことは知っていたが、それはあまりにも苦すぎた。彼はこれこそ丸山の味だと思った。

外へ出ると、不思議な騒音が一度に彼に襲いかかって来た。その音は人力車に乗って町の中を走っているときも彼につきまとってはなれなかった。

丸山遊廓の石畳を歩いているときもその音はどこからかやって来て、彼の頭の底に響いた。足袋屋に居たときも、外から聞こえて来た。金属音ではないが、それに近い音だった。連続的に板を叩くような乾いた音だった。それは天からではなく地から湧いて来る音のようだった。

「ヘイ、ごめんなさい」

足袋屋の角を曲ろうとして、危うく彼にぶっつかりそうになった男がいた。男はモラエスを見上げて、脱げかかった新しい駒下駄を履き直すと前よりも大きな音を得意気に立てて、去って行った。不可思議な日本の音は下駄の音であった。

ホテルベルビューまではそう遠い距離ではなかった。そうは分っていても、日本語を知らないモラエスは不安だった。それに夜でもあった。

彼は帰りも人力車に乗った。

ホテルベルビューでの第一夜はよく眠れなかった。一晩中、頭の中で下駄の音がからんころんと鳴っていた。

蒸し熱いことはマカオと同じであったが、窓を開け放して置くと山の方から吹きおろして来る風が涼しかった。明け方はよく眠れた。頭の中で鳴っていた下駄の音は消えていた。

モラエスは朝食前に散歩する習慣があった。それは旅行中でも変えなかった。航海中はデッキを歩き廻った。起きるとすぐ彼は服を着て外へ出た。長崎の町はまだ完全に目をさましていなかった。

彼はホテルベルビューと隣接して、一段と高いところに、ホテルよりも大きくそり返っている瓦屋根の寺へまず行ってみたかった。その寺はホテルと近接していたが、寺門をくぐるには大きく迂回しなければならなかった。彼は一旦海岸通りへ出てから、寺を眼ざして石段を登った。

寺の広い境内を一人の少年僧が竹箒で掃いていた。少年僧は入って来た外国人にちょっと箒を休めて、円らな目を向けただけですぐまた仕事に取り掛った。

寺の広い庭に松があった。たしかにそれは松だったが、ポルトガルの松とは全く枝ぶりの違った松だった。モラエスは海軍士官であると同時に生物学者でもあった。動植物に興味を持ち、海の貝に関しての彼の研究は学界で注目されたことがあった。

彼は長々と下枝を延ばした松に少なからず興味を持った。下枝から松の頂点にいたるまでどの枝も素直な平面を保ち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com